子どもの遊びと手の労働研究1977年6月10日発行　(第三種郵便物認可)

＜特集・労働をどう考えるか＞

新しい修学旅行を
―労働実習を中心にした卒業旅行―

森下一期

はじめに

和光中学校では早くから修学旅行のあり方を検討してきた。修学旅行と称していた、現在から10年以前にも、単なる見学旅行に終らせることをさけ、事前に見学場所のグループによる調査なども行ない、できるだけ観光旅行化しないように心がけた。しかし、修学旅行と名がつき、予定された時期に行なう旅行には限界があった。子どもの意識が一般的な修学旅行の域を出ないとともに教師側でも毎年同じパターンを出ずに来たと言える。

その時点で、校長提案により、修学旅行を廃止し、学習・研究を主としたものを行なう方向が出された。それ以前のとり組みのねらいを明確に出して、“修学”旅行的な要素を廃しようということである。その理由としては、子どもたちが家庭などでかなり広く旅行をするようになっており、視野を広げるために行なうという修学旅行はあまり意味を持たなくなっているというところにある。旅行の目的を明確にし、中学教育の一部にきちんと位置付くものにしなければならないということであった。

そのときには、種々な構想が出された。その一つに、和光の子どもたちは特に労働から切り離され、無縁となっていることから、農業労働や工場労働の経験、見学をさせることも出された。一年で農業実習、二年で木工など簡単な実習、三年では近代的な重工業の見学などと全くの机上プランであったが、遺跡や遺物の見学ではなく、生産や労働、現代の生活につながるものが和光の中学生に必要ではないであろうかと論議もなされた。

しかし、その実現には多くの困難が横たわっていた。工場見学と言っても、例えば製鉄所であれば、中学生は危険であるということで許可がおりない。製鉄所、鋳物工場と大企業の鉄生産と中小企業の鋳物工場を一連のものとして見学し、基幹産業について考えさせようという試みも、出鼻をくじかれ、実現されずに終ってしまう。石油コンビナートをと考えても、その内容は、手づるはとなると頭の中で消え去ってしまう。

農業労働をと考え、収容できるところはあるだろうか、畜産ではどうか、と考え、下見までは行ったことはあるが、いざ実施ということになると、今一歩の踏み込みができずにこの10年間は過ぎてきた。

この間漸定的に卒業間近のところで、二泊程度の修学旅行を行なってきた。特別、教育的に配慮することなく、まさに卒業するにあたって、思い出と残る楽しい旅行をしようということであり、その性格としては、それ以前に行なっていた修学旅行より後退していたと言える。このことは、教師にとって痛みでもあった。修学旅行の名は廃止したものの、それにかわる新しいものを生み出し得ずに、お楽しみ旅行的なものに終ってきたのであるから。もっとも、卒業の間際に行なう旅行は、情緒的には、クラスや学校への帰属意識を互いに確認する上で、大きな意味を持っていた。逆に言うなら、そのような卒業旅行を10年近くも行なってきたことが、今回の旅行の目的を達成する上では足かせともなっていた。

長年の課題を実らせるには、ふん切るしか

道がなかったと言える。今年度（１９７６年度）、新たに学年会体制がとられる中で、この旅行についても重要な検討課題となり、それを、“労働を行なう”旅行にしようと確認し合うところから、第一歩が始まった。職員会議でも、この方向は歓迎され、皮切りとなるかどうか注目もされた。

牛

1　準備はじまる

四・五月の三年学年会は、三年生の一般的指導が中心であったのはもちろんであるが、旅行について常に話題とし、可能性を追求してきた。そこには、問題点として、①受け入れ場所　②労働の種類　③宿泊体制　④費用　⑤子どもの意見　⑥親の意見　⑦時期などがあった。その全てをいっきょに解決するすべはなく、労働実習を含むものを追求するとしても、最終的には、調査研究的なものに落ちついたとしても、従来の卒業旅行からは抜け出そうという意識で進めた。

第一の難関は実施時期にあった。内容から考え、農業労働を想定するなら、秋に行なうのが良いであろうと、子どもたちに持ちかけたところ、その時期について総反撥をくったのである。受験をひかえている中で９月１０月などとんでもないというのである。全てが終ってからという言葉の強さに、教師も出鼻をくじかれた思いがした。はじめて、新しい構想で出して行ったので、三年生となっての見通しの中に容易には入らなかったということであろうが、我々の新しい旅行に対する見通しを大きく曇らせる反応であった。

子どもたちの反応は、時期の問題も含め、最初はあまりかんばしいものではなかった。とは言えのびのびとした旅行がしたいとも主張したが、単に野放図なものを考えていたわけではなく、これといったものが含まれることも期待していたようである。親の方は、子どもに汗を流して労働を経験させたいという声とともに、なにも最後の旅行にそんなことをさせないでもという声もささやかれた。

いずれにせよ、具体的に示していかねば、事は進まないと判断し、場所をさがしはじめた。いざさがすとなると、仲々出てこないものである。農協へ電話をかける。父兄から紹介をうける。新聞記事をたどる。雑誌社に問い合わせる。等々あらゆる努力を行なった。しかし、可能性が見られたものはそれ程なかった。具体的に候補に上ったのは、京都府の美山地区であった。だが現地視察を行なったのは８月であり、なしくずし的に９月実施は消えて行ってしまった。

現地を見た美山地区は受け入れてくれる側の意識も、環境も素晴しいものであった。しかし、バスを乗り継いで行かねばならず、３月実施の場合、雪でバスが通らないという。とは言え他に候補地がない以上やむを得ないと判断したが、極めて危険であるということで校長から禁止されてしまった。

この時点で全く窮してしまったが、幸い、校長が、高山市松倉中学校の中舎校長に連絡をとってくれたので、渡りに船と、具体的な展望はなかったが、現地に飛んで可能性を追求した。それが１０月１日である。ここで、

労働実習の可能性がなければ、その旗を下さざるを得ないであろうとさえ判断した。

現地で中舎校長に相談したところ、即座に家具生産の飛騨産業、農家、飼育、陶芸の小糸焼に連絡をとってくれ、基本的な了解を得ることができた。この時点では具体的な仕事の内容が固っていたのではなく、まず受け入れてくれるか否かにあった。すぐさま出向いて打ち合せを始めたのであるが、一日二日で内容がつまるはずもなく、収容人員のわくをきめたぐらいである。だが、この四ケ所では、2学級87名は無理と思えたところ、宿とした民宿の御主人が竹細工の職人であったこと、おくさんの実家でわら細工をやっていることを聞き、そこを入れると人数がそろうと思いお願いをしてしまった。

内容の整理は後のこととして、具体的な形となったのは、この時点である。全く突然ではあったが、中舎校長の御助力により、高山の方々は、我々の主旨を仲々良いことだと理解して下さり、受けてくれたことが展望をひらくところとなった。

この段階で生徒に呈示できるところとなり、議決が行なわれた。以前に決っていた旅行委員がアンケート調査を行なったとき、観光を目的としたものばかりでなく、労働などを含んだものもかなりいたことから、当初予想していたよりも、労働実習を行なうことに抵抗感はないのだなと判断はしていたが、高山で上記のような内容を持って行なうというときに、どのような結論を出すか、心配でもあった。

一方の組では、四月以降教師も提案し、受けとめてきたものとして、論議もなく通過したが他の組ではかなりの議論になった。一つの論は、楽しむ旅行にできないか、ということであった。また、高山にする理由は何故か、本当に良くさがしたのか、といった質問も出た。これには、すでに記した経過を述べることにより理解を得、全体としては、そこまで進んでいるなら、今更しようがないという気分を部分的に持ちながら、一名の保留で決定に持ち込んだ。

これまでと違ったものをやろうとするとき、子ども達の意識をそこに向けながら進めなければ、十分なものにはならない。その意味で可能性の有無を教師の方ももっていない中で組織していくことは極めて困難なことである。まして、労働という、子どもたちが知らない、知っていても、大変なこと、面倒くさいことと意識されているものを入れていくことは大変である。子どもの中学生活の中から子どもたち自身に引き出させる道が容易には見つけ出せないのであるから。従って、今回のとり組みは教師主導型になっている。旅行の主旨も教師が提起し、下準備も教師が整え、子どもたちに選択をせまっていったのである。その組織過程は決して十分なものと思っていないが、今回、最初のとり組みとして、当然であったとも考えている。

いずれにせよ、両クラスともこの内容で行なうことを決定し、すぐさま、どの仕事を選ぶか希望もとり始めた。特徴的なことは、焼き物などに集中したことである。しかし、人数制限があることも理解し、ふりわけられてもいった。その中で、内容に立ちもどらなかったのは、決定の過程を経たからと考えられる。

2　卒業実習旅行のねらい

場所を決め、仕事を決めてから、本格的な準備が始まった。その後二回にわたる現地打合せで、それぞれの仕事の内容のつめを行なう一方、この旅行の内容的な整理を行なっていった。

何しろ、実施しようということで準備を進めてきたのであるが、心に引っかかるものを常に持ち続けた。それは、全く一時的な旅行の中に労働実習を含めることにどれ程の意味があるか、ということである。日常の生活、

教育の中に位置付けられていないものを、特殊な状況の場で行なうだけであるなら、単に経験したにとどまってしまう。それで良いか、と反問を続けてきた。それについての回答は生まれていない。従って、“労働の教育”とか“労働を教える”といった正面から労働を見すえたものではなく、労働の経験を通して、労働について考えさせることであろうと、限界を持ったとり組みと考えた。それであっても、事前、事後のとり組みを行なうなら、労働を教える、一つの有効なとり組みとなるのではないかとも考える。労働の内容についてあらかじめ調べ、実習をし、技能を部分的にであれ身につけ、まとめをする。現実の労働を行なうことが、学校内での労働とは違うものを与えるであろうとも考えられる。

しかし、今回は、準備のおくれや、教師に見通しがなかったため、事前のとり組みがほとんど行なわれていない。卒業直前であるため、事後のまとめも行ない得ないという中で、まさに経験するにとどまるのか、とも考えていた。

更に、人数の関係もあり、焼き物、竹細工わら細工といったものを入れたことも、今回のとり組みに混乱をまねいた。はたして、この内容で労働実習と言えるかどうかと。決めるときは、わらをもつかむ思いで受け入れ先をさがしたのであるが、立ちどまってみると、不安が増してきた。ところが、具体的に現地と打合せていくと、言葉としてのわら細工、竹細工等が持つ、趣味的なものとは違うものがあることを発見した。よく考えればあたり前のことであるが、わらじにしても、竹かごにしても、生活必需品であり、それをつくることは、生産労働の主体ではないとしても、欠かすことのできない仕事であったことである。かっては、子どもは、なわを一定量なわねば遊びに出してくれなかった。竹ヒゴを作ることが課せられていた。焼き物も、高山の地で茶わん等を自給自足する中で育ってきたと言われて、生活と密着した労働であることが見えてくるのである。従って、つくるものは、ほうきであり、わらじであり、竹かごであり、茶わんである。子どもたちの最初の反応は、手工芸的な趣味的なものであろうと思えるが、その展開、見るべき所をおさえるなら、そこから脱皮して、生活を支える労働としての一面を見ることができるであろうと整理することができた。

このように考えながらも、最初のとり組みとして、労働を経験するだけでは子どもを引きつけ得ないかという不安ももった。そこで、高山市を選ぶことができたため、今一つ、高山という地域を知ることに焦点をあてることとなった。観光地としての高山の持つ魅力によりかかろうとしたのである。しかし、最初の発想はそのようなものであったが、高山について知れば知る程、そのこと一つでも旅行のねらいになり得るとも思えた。そこで、労働実習の中で高山の人々と交わり、労働を通して高山という地域の一部分を知ることが高山への理解を表面的な観光地なものから一歩深めることになるであろうと考えたのである。例えば、従業員６００名を超える飛騨産業で実習するにも、使い物にならなかった落葉樹のブナの利用を開発するために、森林にかこまれた高山の地に設立されたことを知って工場労働の一部を経験することは、どこで行なっても同じではなく、高山と結びついた木工場の実習となっていると思えるのである。

3　実施の内容

以上のような内容的な整理を行ないながら年が明けてから具体的な準備を進めた。

仕事は次の六種となり、そこへの参加は

木工場(飛騨産業)		男子	１３名、	女子	０名
農　業	島田さん	〃	３名、	〃	３名
	中村さん	〃	３名	〃	３名
	清水さん	〃	３名	〃	３名
	瀬の上さん	〃	３名	〃	３名

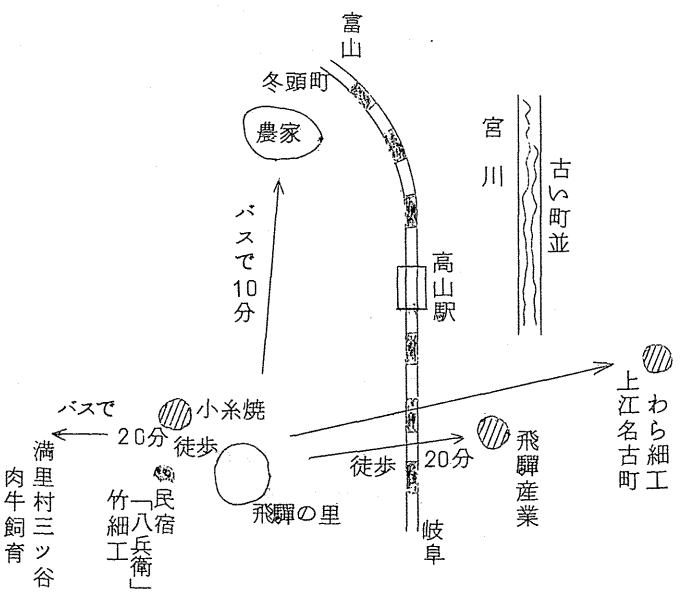
肉牛飼育　　男子　4名、女子 16名
　三ツ谷肉牛育成組合
焼き物(小糸焼)男子　9名、女子　1名
竹細工(面谷さん)　〃　3名　〃　8名
わら細工(藤井さん)　〃　4名　〃　5名
となった。

日程は、旅費を出きるだけ少なくしようと↗当初は行き帰り夜行(高山までは新幹線を使わないと、非常に不便になっている)を考えたが、異常寒波が続いた時でもあり、疲労するのではないかという心配も強く、最終的に行き新幹線名古屋まわり、帰り夜行富山まわりとして、次のようになった。

	6:00 7 8 9 10 11 12 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10
3月 7日(月)	7:30 東京駅集合　1:45 高山着　飛騨の里見学　夕食　消燈
3月 8日(火)	6:30 起床　朝食　出発　実習　夕食　飛騨高山について　消燈
3月 9日(水)	〃　〃　自由　消燈
3月10日(木)	〃　〃　学級会　消燈
3月11日(金)	7:00 起床　グループごとの市内見学　夕食　6:18 高山発
3月12日(土)	6:38 上野着　解散

民宿からそれぞれの仕事場へ行く足が大きな問題の一つであったが、路線バスを使おうにも、4時から6時半まで一本もないといった所もあり、頭を悩ましたところである。

地図の概略を示せば、図のようになる。このようにあちこちに散らばったところにかよわなければならないとり組みに大きな不安を持っていたのであるが、「八兵衛」さ



んの親身な好意によって、他の民宿のマイクロバスも手配でき何の混乱もなく行なうことができたのである。

生徒の組織は、高校入試の直後である（内進試験は1月末であったが）こととか、教師も初めてのこととして、どのような体制が望ましいか明確な見通しも持てなかったことなどから、宿泊の部屋ごとの部屋長と、仕事ごとの代表とを決め、全体をこれまで企画を教師とともにねってきた旅行委員四名が総務となってまとめるという、簡単なものであった。ここでは、先きに述べたような、子どもたちの、卒業の旅行だから“自由にしたい”“楽しみたい”といった気持ちに若干おされ、できるだけ簡素にしようという気持ちが働いたのも事実である。従って、日程的にも、一日の仕事のまとめや、相互の交流など、どの程度行なえるかといった不安もあって、きちんと位置付けることが弱かったようである。その点は、準備段階の不十分さ、帰ってからのまとめの不十分さにも見られる。はじめての試み、それ故に出てきた時期の問題などからやむを得ない面もあるが、現地での、働くことや高山の人々とのふれ合いに感動する姿と、宿舎でのダラシナイ生活が混り合ってしまったことを考えると、旅行の目的をより明確にし、それに向けてもっと組織的にとり組むべきであったと反省したしだいである。

教師は三年所属の四名と助手として和光大の四年生が指導に当った。下見を都合三回行なったのであるが、現地に行くまで、いや、実習の第一日目が終るまで不安はつきなかった。農業は近いとは言え4軒であり、場所としては、9ケ所に子どもたちが分散するのである。当初は二学級に四名の教師が付くのであるから条件的には悪くないと考え、進めてきたのであるが、実際に始まるとなったときに、はたして、教師がそれぞれの場所につかないで大丈夫であろうかという不安にとりつかれてしまったのである。もちろん、そのためにこそ、事前の打合せを何回か重ね、先発も出して、最後のつめをしてはいたが、受け入れ側も初めてこのような形で中学生を受け入れるのであるから、心配しだせばきりがない。農業では、島田さんを中心に何回か寄合いを持って受け入れ体制をつくってくれている。飛騨産業でも、組合との交渉の中でも話題になり、製造部で具体的な検討を進めているなど、それぞれのところで、真剣に進めてくれているからこそ、それに応えるよう子どもたちがやってくれるかといった心配も加わり、高山に着いた日は、全く落ち着かなかった。しかし、踏み出してしまったのだからと、農業、飛騨産業、肉牛飼育は生徒数も多かったので、各一名づつ教師が付きそい、他のところは、一人の教師が巡回する体制をとった。助手は、常に車で移動する役割をはたした。

非常に緊張して実習第一日目を終えるのであるが、その中で、重要なことに思い当った。当然のことではあるが、この体制ほど、子どもたちにとって手厚いものはないということである。即ち、私達は四名で引率してきたつもりであったが、それは間違いであり、指導者は、何十名もいたのである。それも、その道の専門家が指導してくれるのである。教師はまさに、付き添いでしかなく、子どもたちは、数名に一人の指導者を得て学んでいるのである。飛騨産業では、二人一組で、職場の労働者から手ほどきを受け、励まされ仕事をしている。旅行として、数名の教師が引率してまわるのにくらべ、何と手厚い指導体制であったか。準備は決して楽ではないが、直前に感じた不安はその意味では、とり越し苦労でしかなかったとも言える。その分、受け入れて下さった方々には、多大の迷惑をかけているのであろうと逆に実感するとともに、このとり組みの主旨を理解して下さり、心よくひき受けて下さった高山の人々により深い感謝の念がわき起ってくるのである。

4　現地にて

前おきのようなものが非常に長くなってしまったが、子どもたちのとり組みを子どもたちの記録（一人一人にノートを与え記録をとらせた）をおりまぜながら綴ってみよう。

＜出発＞3月7日

“仕事をする”“寒い”“雪が残っている”ということで、長グツやブーツをはき、アノラック姿で新幹線で高山に向う。仕事をしに行くのに、遊びに行くような格好をしないだろうか、といった不安もあったが、一，二を除いてほとんど気にならなかった。長グツ姿で新幹線に乗るのは恥かしいなどと言うかとも思ったが、あまり気にしないものが多いようた。

しかし、最後の旅行を楽しもうと、さわいでいる姿に、はたして、労働が彼らの中に何か残るものとなるかと、不安を感じざるを得なかった。

高山線で進むにつれ、雪が見えはじめる。高山市に入るあたりでは、一面の雪である。農業や飼育など、大丈夫だろうかとまたまた心配になるが、空は快晴で意外と暖い、宿の人に聞いたら、今日から急に暖かくなったとのことだった。あとで、子どもたちから“寒くないではないか”と文句を言われたほど、例年とくらべても、良い条件となっていた。

夕食までの時間を宿のそばにある“飛騨の里”に行って、合掌づくりなど、飛騨の生活の歴史を感じさせようとした。興味を示す子どももいたが、大半はサッと一まわりであとは雪とたわむれたり、五平餅やみたらしダンゴに魅せられたようだ。

夜は子どもたちはノンビリしているが、教師は明日をひかえて緊張して先発隊と打合せ。子どもたちへは、総務や部屋長と生活のきまりを確認し伝え、仕事のリーダーと出発時間、服装、持ち物を確認する。生活の面では、消燈後など若干ゴタつくが、何とかスムーズに行く。

＜実習第一日目＞　3月8日

飛騨産業へは、8時までに出勤するようにとのことで、7時半にはブツブツ言いながら徒歩で出発。9時までにマイクロバス、乗用車で全て出発する。

第一日目は、それぞれのところで、工夫をしてくれている。

飛騨産業では高山に洋家具工場が興った由来 ― 地域の産業として育ってきたことをわかりやすく説明し、広大な貯木場、製材から家具生産までその全てを見学させてくれた。曲木の技術を含水率との関係で開発してきたことなど、これまで役に立たなかった落葉樹のブナ（成長遅く、密度が高い）を使うことから生まれてきたという。そこに付き添った私が技術科の教師であることもあって、私の方が勉強になったと思う程、興味をそそられた。また、工場に於ける安全性の問題もくり返し強調し、子どもたちを緊張させた。それが単に言葉だけでなく、見学の中で、安全装置、集じん機など示す中でも語られ、子どもたちの仕事のわりふりの中にも出ていることで実感できるものであった。

一人の子どもは次のように書いている。

「本日飛騨産業に行った。椅子・テーブル業界の10指に入るという当会社は思っていたとうりの大会社であった。

一歩工場内に入ると労働者の人々が熱心に作業をしていた。製造部長の話によれば、見ればごくかんたんに見えるこれらの仕事もいざ行うととてもむずかしいそうである。明日から楽しみ。」＜　・F＞

農業では都会の中学生がどこまでやることができるかはかりかね、種々な配慮をしてくれた。午前中は近くの屠殺場や牛のセリ市の見学を組んでくれた。とくに屠殺場は強烈な印象を与えたらしい。それはそれとして意味

を持ちつつも、「早く働きたかった」という感想を出す子どももいるように、子どもなりの期待と大人の配慮とが若干くい違うところもあった。私たち教師も、その子どもたちの期待には驚ろきを感じさえもした。しかし、ある子どもが、最後に「私は農家でいろいろな事を経験した。そこの人たちはとてもしんせつで私たちにたくさんの事をやらせてくれた。ビニールハウスのビニールがけや雪かき、それにわら細工や子牛のせりなど……一見、農業には関係ないようなものなんだけど、全部農業に関係あるものだ。わら仕事は冬、外で仕事ができないとき、家でやる仕事として、昔やられたらしい。」<N・O>と述べているように、雪が残っている農閑期であったからであろうが種々工夫して下さったことを農家の生活としてうけとめることもできたようである。

木工所

午後は四軒にわかれてビニールハウスづくり、はちへの土づめ、溝づくり、草むしり等の仕事に入るが、一様に「おもしろかった。向こうの人と会話ができた。とても親切だった」と感想を述べている。要望として、仕事をもっとしたい、とさえ述べている。

肉牛では、やはり都会の中学生が牛のにおいに耐えられるか、といったことも心配して下さり、１４ヘクタールある敷地でノンビリして下さいという状態から始まった。私たち教師も仕事はやらせたいと思うものの、具体的なさせたい仕事を事前に見い出すことができず、また、子どもたちがどこまでやれるかもわからなかったので、少々不安をもって当日をむかえざるを得なかった。その意味では、仕事を見つけ出しながらとり組んでいったと言っても良い。午前中は飼育小屋、牧場の見学、雪合戦で費し、午後、「ムリだろう」と言われていたフンの始末をやらせてもらう。

教師も「できるかな」といった不安はあったが、おがくず集めでは人手があまってしまうこともあり、何とかやらせてもらうことにした。でも、この日は、子牛の小屋である。

「初め、子牛小屋に入った時、はっきりいって、とてもくさくていやだった。けれど、人間とはおそろしいもので、小１時間ほどすると、臭いなどまったく気にならなくなった。

フンの始末をする時、はっきり言えば、アンモニアくさいし、ぐちょぐちょしているのでいやだった。しかし、やってみればおもしろいもので、フンの始末をした後、おがくずを入れて牛がたわむれていると、涙がでるほどうれしい。一生懸命やることはいいことだと思った。」<A・W>

竹細工では、竹細工の由来を聞き、一べんに竹に行くのではなく、荷づくりのビニールひも（巾のあるかたいもの）であみ方の基本を教えてくれる所から始まった。

（子どものメモから）　竹細工の歴史
税を払えない人、払いたくない人達が、山奥に逃げこんで（平安時代）生活していた。　その時、

生活のために山の竹を使って、いろいろなものを作り、一年に一回ぐらい、町に売りに行って生活をした。
　その他は、百姓が冬に竹をあんで自給自足で使っていた。

わら細工でも、稲をどのようにつくるか、といった話から、高山の地から見える日本アルプス、近所の牛の飼育、チューリップの栽培を見せてくれるなどの予定を組み、最も基本となるなわないからホーキづくりをしてくれた。子どもたちはやはり、わらでつくることに傾斜していったが、宿にもち帰ってまでやろうとするなど、非常に興味を示した。

焼き物では、陶芸教室の教場があり、そこでのろくろの実習が中心であったが、「うり物になるまでには十年かかる」という言葉を聞きながら、自からの手で土を扱うことに挑戦をし苦闘をしていた。

このような内容で始まった実習の第一日目は、私たち教師の心配をよそに、子どもたちは子どもたちなりの期待をもって臨み、高山の人々とうまくまじわることができるか、仕事が自分に耐えられるかどうかと緊張してすごしたことを見ることができる。
宿に帰った時の顔つきを見て、それぞれに満足してきていることはわかったが、それでも、もともと、希望に片よりがあったのを、人数制限があって調整し、第一希望でないところに行った子どもたちが多かったので、他の話を聞くことによって、うらやましがったり、ぐちったりするのではないかと心配もしていた。
しかし、各仕事ごとにミーティング（現地でやったものもある）を持たせ、代表者会で報告し合ったところ、そういった雰囲気はほとんどなく、それぞれの仕事の楽しさ、面白さを発見し、ひきつけられはじめていることがわかった。

＜実習二日目・三日目＞　９日・１０日
二日目は飛騨産業も朝８：００からの実習が行なわれ、本格的なものとなる。
「今日からいよいよ労働です。生まれて初めて工場で労働するせいか、とてもわくわくしていました。私が初めに受け持った仕事は木板にのりを着ける事でした。そばに４５～６のこわそうな人がおりました。“のりを着ける”と聞くとごく簡単だろうと思われる人が多いと思いますが、それは大きなあやまりです。ただ着けるのならまだしも、売り物にのりを着けるのですから、こっちは必死です。なるべくはみ出さぬように着ける。ここがのりを着けるポイントと言えるでしょう。
次にはプレスの機械を使用した。初めから私はこの作業を行ないたかったのでとてもうれしかった。いざやってみると、ただ一言「むずかしい」という事でした。初めてやったせいかもしれないが、ひとつまちがえば木はおれてしまうのですからたいへんです。今日一日一本も木をおる事なく終える事が出来た。それから私がプレスをあつかう上で指導してくれた中年の女の人にあつく感謝したい」
＜Ｔ・Ｆ＞
「……前略……イスの背もたれがくっついたものと清水さんが作った足の部分を接着させる。おもしろい。そやけど責任重大な仕事だった。本当にイスを作ってんだなーと思った。
自分の作ったものが本当に売られると思うとイイカゲンに出来なく、とってもやりがいがあった。もちろん他の仕事だってちゃんとやった。
「とってもつかれた。そやけど、とっても貴重な一日だった」＜Ｙ・Ｍ＞
「今日から飛騨産業で仕事だった。とてもつかれたの一言だ。はじめはつめるのでらく

だったが、午後キツツキマークをはるので、ほんとにつかれた。あしたが苦しい。キツツキマーク６３０枚はった。」＜M・M＞

ふだんふざけてしようがない子どもたちも全力でとり組んでいる。二人一組であるからおしゃべりをしながらやるのではと思っていたら、職場の人々からやり方を教えてもらったり、やさしく声をかけてもらったりする以外は、緊張して、黙々と働いている。あの子どもたちが、ここまで身をひきしめてやることができるのかと目をうたがったぐらいである。一日が終って控室にもどるときは、へたり込みそうな姿でもどってくる。そして、八時間労働のつらさを身をもって知ったという。このような同じ仕事を何年も何十年も続けている人々に対し、真に不思議な気持ちも持ちつつも、腹の中であざけるのではなく、卒直に労働のもつきびしさを感じ、自分もまがりなりにもできたことにじわじわとした喜こびを示すのである。そこには、職場の人々が自分達をやさしく受け入れてくれたことに対しての安ド感があるのであろうが、グダッとして帰って来ながら、夕食時には、“俺はキツツキマークを何百枚はった”“本当の８時間労働をやったぞ”とむしろ誇らしげに語る言葉の中に、素朴な、肉体労働のこころよい疲労感と満足感を表わしているように思えた。それを口にする子どもたちの顔には新しい発見をした驚ろきと、すがすがしさが見られた。

他の場でも、二日目、三日目になるにつれ、コツもおぼえ、高山の人々の気持をより深く理解して行き、離れがたいものを感じていくのである。

肉牛飼育で、次のように記録している。

「今日が最後、残念。ハリキッテ働くぞ！

午前、また二手にわかれた。１組はえさやり、２組は子牛にミルクを。

えさやり

２０kg、３０kgのえさを牛に与える。

また、トラックの後にのってシュッパツ

わら（牛のえさ）をかごの中に入れて与える。わらを入れるとわりと重くなる。

私がしょうとまるでかごが歩いているようだった。

２０kg、とうもろこし又は麦が入っているふくろ。一ふくろを二つの牛えさに入れた。わらの上にこのえさを。

麦は肉となるそうである。

３０kg入りのふくろをこんどはあたえる。

私“２０kgでフーフーいってるんだから
　３０kgは無理かな？”

おばさん“そうさねー　やめといた方がいいんじゃない。ぎっくりごしになるかもよ。”

私、自分の力のなさにがっくり

トラックにのって、フォークでえさ

出口が楽しそうにやっていたので私もでしゃばってやらせてもらった。一回はまーまー二回目に長ぐつに　ぶす。さしてしまった。

おばさん“だいじょうぶ、くつぬいでみー”

私　あせってしまったが“だいじょうぶ”

もうこりて、フォークを一回もさわらなかった。本当にけがしなくてよかった。

―中略―

午後のしごと

フンそうじ昨日と同じ大きな牛さんの所のおそうじ。ぐちょぐちょ長ぐつがフンの中に入り込む。うんよく長ぐつの中には入り込まなかった。やはりくそは重く、私はひーひーいった。ラグビー部だかの大学生と森下先生も参加。二人とも力があるせいか、どんどんはこんでいた。私は農家むきではないのだ。しかし、力がないということはかなしいことだ。―後略―」　＜K・O＞

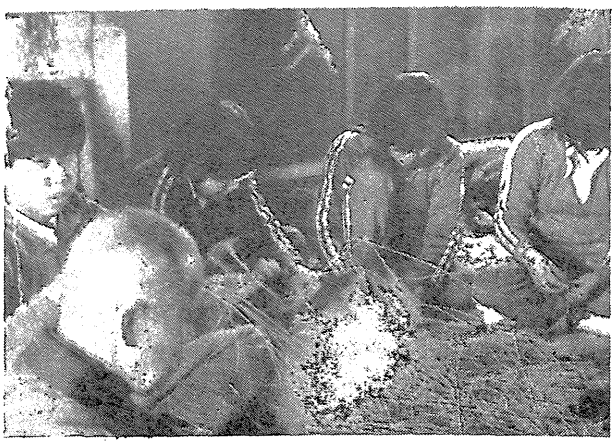
（紙数の関係で他は略させてもらいます。）

＜最終日＞　１１日

自分たちでつくったグループごとに市内見学をする。仕事の中で高山の人々を知り、その目であらためて飛騨高山をじっくり見せた

いと考えたのである。第二日目に高山の歴史を教育委員会の文化財保護に当っている方に話をしてもらったり（若干むつかしかったが）、自分たちでも調べたり、聞いたりしたものをもとに計画を立てさせて行なった。

しかし、事前の高山という地域についての調査・研究など不十分であったので、何割かの子どもは時間を十分に使って見学し、高山を知ろうとしていたが、時間をもてあまし、もっと仕事をした方が良かったという子どももいた。



わら細工

5　最後に

子どもたちのまとめをいくつか紹介し、今回のとり組みをまとめてみたい。

「私は、はじめ修学旅行は遊ぼうと考えていた。だからその旅行で働くということに反対だった。だけど今は労働をしてよかったと思っている。もし、遊びだけの旅行だったらこんなに充実した旅行にはならなかっただろう。 ― 中 略 ―

そこの人たちは、みな心がきれいな人たちだった。近所づきあいというのがとてもよく見られていた。東京では、こんなことはないだろう。近所づきあいというのは、例えが私たちが道を歩いていると本当に気持ちよく声をかけてくれたりして、不思議と心がなごむ感じだった。ことばもなんとなく卒直な感じをうけた。町全体が、私たちを心よくむかい入れてくれた感じだった。他の人、よそ者は“いやだ”という都会人とはまるで正反対の人たちで、私たちは気持よくそこの土地に入れた。そこの人たちというのは、人が良く、よそよそしさがなくて、なじみやすい。そんな感じの人で、それで、とても気をつかってくれて本当によかった。

私はこの旅行で人と人とのふれあいというのを強く感じた。」＜N・O＞農業・女子

「自分たちで本当に使っていく旅行だったと思う。3日間だけだったけど牛さん達にかこまれて仕事をした。私にとってこんなに長い肉体労働をしたのは始めてだったせいか、体がいたくなった部分もあったけれど、仕事が終ったあとは気持が良かった。

体を使った仕事というのは、はりあいもあるし、自分の力を使い、動かすのでやりがいがあるものだと思う。でも仕事が単純という面でわりとあきやすい仕事のようにも感じられた。また、いって働いてみたい。」

＜K・O＞　飼育・女子

「仕事については、みんなつかれてヘトヘトになって宿舎に帰って来るほどよく働いたらしいからよかったのではないか。東京ではできないような仕事を卒業旅行で経験できたということはすばらしい事だと思う。個人としてもめったにできない仕事（飛騨産業）をやることができて、働く事のきびしさがわかって良かった。そして、一つの物ができるまで、どれだけの人、手間、時間がかかっているのか知ることができてよかった。また、できた物を箱につめる事が意外にむずかしかったことにはおどろいた。

僕は働くことによって社会のきびしさがわかったような気がしたと同時に、金をかせぐ

事がどれだけたいへんな事だかわかった。そして、あんなきびしい仕事を一年も二年もずーと通して来た人のえらさをはじめて発見した。」　＜J・I＞　飛騨産業・男子

「一言で言えば、最高に良い人ばかりの町だった、と言えるだろう。みんな人のいい、気のよい人ばかりだった。

工場では、帽子をかぶって、さあ一仕事するぞと思って、みんなの前を通ると、みんなが“ジロ”とすごい目つきで見たのでイヤーな気がした。

仕事をしているうちに、良い人だなーと思ってきた。仕事はどれもつらく苦しかったが、やりがいがあった。つらい時に思うことは、このような事をみんなは毎日やっているんだなーと思うとつかれがとんで行くような気がする。がやっぱしつかれた。

帰る時（最後に）みんなは口々に“がんばれよ～”とか“元気でな～”やら“生産がさがったど～”“また来いや～”と言ってくれて気分が良く、けれども、またあしたも来たいような気がして、みれんが残った。

みんなと共にもっとやりた～い。つらくてもい～～～。

本当にそう思った。なぜなら、みんなソボクでとっても親切で良い人ばかりだったからであろう。」　＜Y・M＞飛騨産業・男子

子どもたちはいろいろな角度から今回の取組みを自分の中にしっかりとめようとしている。十分に表現されているとは言えないかもしれない。あるいはまだまだ浅いかもしれない。しかし、ある子どもは、三年間で一番学ぶものが大きかったと述べ、また、三年間のまとめとして素晴しかった、と言い、これを今後にどう生かすかを課題にしている子もいる。

現代の子どもたちは（都会のそれも私立の中学校の）本当に労働から切り離されている。子どもたちの最初の反応に見られるように、働くことは面倒くさい、イヤなことという先入観が支配しているのである。少なくとも、その点については、今回のとり組みを通して、頭からイヤがり、さけようとする気持をぬぐい、労働に目を向け、考えようとする材料を与えることができたのではないかと思える。もちろん、私達がねらっているのは、単純に労働を楽しいと思わせたいところにあるのではない。勤労第一主義を出していくわけではない。現在の体制の中では矛盾ははなはだしい。しかし、仲間とともに体を使って働くことには、きびしさ、矛盾はあるとしても、汗を流し、苦労し生産した喜びが存在するであろう。和光の子どもたちも、高山の人々 ―足を地にしっかり下し、生活している人々と交わる中で、それらの人々が日々行なっている労働を体を通して理解して行ったように思うのである。ほとんどの子どもが、労働に新しい発見をし、人とのふれ合いに新しい発見をしていると言える。これが、子どもたちの次への踏み台になることを願っているのである。

私たちも、子どもたちが、このように感動をおぼえ、素晴しさを感ずるとは予測していなかった。労働のもつ、喜こびが基本的にはあるとしても、やはり、高山の人々が、子どもたちを心から迎え入れてくれたことが最大の理由であろう。それにつけても、大人が、子どもの立場や気持を理解しながら、子どものために働きかけることがどれ程、子どもたちに大きな影響を与えるか、実感として確認できたように思う。

とは言え、今回のとり組みはまだまだ不十分なものを残している。それぞれの場で学び感じとったものを相互に交流し、深めたならば、どれ程有意義となったか。しかしくり返し述べるように、帰京したら、四日後が卒業式である。一人一人の胸の中におさめてもらうだけで終っている。

また、わら細工、竹細工、焼き物など、位置付けは2で示したように行なったが、子ど

もたち自身“労働というより学習であった”“自分にとっては趣味的なもの”と書いているように、更に一歩を深めることが出来なかった。子どもたちは、熱中し、高山の人々の心あたたかさをそこでも他と変わらず感じているのであるが、一つものたりないものが残る。竹細工を教えてくれた民宿「八兵衛」の主人、面谷さんが、「自分の子どもたちは目も向けてくれない竹細工に喜こび、楽しみを見い出してくれた子どもたちがいることが本当にうれしかった」と涙ながらに語っていたが、竹職人として長年やってきた職人の願いをそこに見ることができる。そこを子どもたちにわかってほしいと思ったが、仲々容易なことではないようである。

高山という地域を理解するということも、人の交わりを通しては漠然とでき、また行きたいという気持は生み出したものの、歴史的なものをふまえた理解には、事前の準備不足で不十分であった。

一年間かけてとり組み、多様な中味があるため、繁雑になったきらいがある。報告したいことが多すぎるため、チグハグもあるであろう。紙数の関係もあって書きつくしたとは言えないが、この卒業実習旅行は子どもたちも、また受け入れてくれた高山の人々も、もちろん、私達教師も課題を残しながらも“やり切った”と言えるものとすることができた。これを出発点に、現代の子どもに欠けるものを少しでも埋めていくとり組みを地域の人々とともにつくり上げていきたいと考えているしだいである。

（和光中学校）